

いっか僕も

栃木市立藤岡第一中学校

三年

腰塚

亮真

男

今、僕が書こうとしていているのは、小さな親切の作文だが、僕が受けた親切は言葉では表せないほど大きく、僕にとって一生忘れられないものになるだろう。

体育祭予行の日、僕は走っていて腰に激痛を感じた。バランスがとれなくなって倒れ、動けなくなり、救急車で運ばれた。息をす

のも辛い状況の中、僕は悔しさでいっぱいだった。何でこんな時に……クラスのみんなに申し訳ない。最後の体育祭なのに。僕は込み上げてくる涙を抑えることができなかった。

検査を終え、結果は腰の剥離骨折。体育祭出場は絶望的だったか、三週間後の修学旅行ですえ無理だろうとのことだった。僕はただ病室の白い天井を見つめていた。

夕方、母が担任の先生から聞いた話をしてくれられた。クラスの友達が心配してくれている

こと。代走のことなんて考えずに、すっかり  
 休めと言っていること。嬉しかった。心の中  
 にじんわりと温かさか広がるのを感じた。  
 体育祭翌日は日曜日だった。絶対に疲れて  
 いると鬼うのに、電車に乗ってクラス三分  
 の二の友達がお見舞いに来てくれた。五日ぶ  
 りに会った友達はとても元気だった。一修学  
 旅行は一緒に行く。無理してでも自分たち  
 が連れて行くから。と、みんなが言ってくれ  
 た。あきらめていた僕の心に希望が生まれた。

その日、僕は入院以来、初めて車椅子に乗  
 った。本気でリハビリをするしかないと思っ  
 た。けかの症状のせいで、思う存分リハビリ  
 ができないのかもどかしかった。主治医は僕  
 の気持ちをよくみとり、ギリギリのところまで  
 リハビリを入れてくれた。

修学旅行一週間前、僕は登校した。その二  
 日前に松葉杖を始めたばかりで、ほとんどが  
 車椅子での生活。正直、不安だらけだった。

だが、僕を待っていたのはたくさんの友達だ

った。移動のときは、何人もの友達か僕を守  
 るように周りを歩いてくれた。不安は、あ  
 という間に安心に変わっていった。

そして、修学旅行。僕の周りには、先生と  
 添乗員さんと、そして友達かいてくれた。そ  
 の頃はもう松葉杖で歩けるようになっていた  
 か、疲れすまないようにと長い距離は車椅子  
 を押ししてくれた。僕の荷物を持つ人、松葉杖  
 を持つ人。クラスの友達か代わる代わる僕を  
 助けてくれた。坂の多い清水寺にも、僕は行

けた。当日は雨で階段が濡れていた。僕の前  
 後には友達か、いざというときに備えていた。  
 親身になって僕を支えてくれる人かいたか  
 ら、修学旅行に行けたのだと、今、改めて思  
 う。友達か当たり前のような顔をして、僕を  
 支え続けてくれたことに、僕はとにかく感謝  
 している。卒業までに、僕も何か友達に返し  
 たいと思うか、それは無理かもしれな。だ  
 からこそ、この日々を忘れずに、今度  
 は僕か誰かの支えになりた。と思う。